

大宮村山口登山道 道者みちを歩く コース上の史跡などの説明

道者道（どうしゃみち）

大宮から村山までの道は「道者道」といわれ、道者（富士登山者）が通った道である。昔の富士登山は「六根清浄ろっこんしょうじょう」を願う修行で、眼（視覚）、耳（聴覚）、鼻（嗅覚）、舌（味覚）、身（触覚）、意（意識）の6つについて、不浄なものを見ない、聞かない、嗅がない、味わわない、触れない、感じないために俗世との接触を絶つため、富士登山によりケガレをとり清らかになるよう願った。かつては登山の際に掛け声としても用いられたのが六根清浄である。

道者道は、先達（せんだつ）という登山のリーダーに導かれ山頂を目指した道者の姿を想い起させてくれる貴重な道である。

① 舞々木の「富士山道」道しるべ

ここは登山道と山宮浅間神社へ向かう御神幸道の分岐点である。

この道標は、正面に「右富士山道」、裏面に「寛政元己酉年林鐘日」(1789)とある。

造立者として「大宮町 寺田左衛門 樋口茂？ 須藤鐘右衛門」の名が見える。

（→大宮町の方、3名の方のお名前が、造立者として刻まれています。）

（富士宮市立郷土資料館企画展 「富士宮の古道と道しるべ」展による）

② さいの河原の六地藏

ここは俗に「さいの河原の六地藏」と言われている。現世とあの世を分ける境目にあるとされる三途の川の河原は「さいの河原」とよばれる。六地藏は生まれ変わりを繰り返す人間の魂を救ってくれると考えられていた。富士山を目指してここをゆく者はこのお地藏様が魂を休めてくれ、身を清めてくれると信じ、お参りしたという。

③ 二又十三仏（ふたまたじゅうさんぶつ）

（進行方向の右側の石段を登った所。）十三仏とは、死後の世界の審判を行う十三の仏様で、十王をもとにして、江戸時代になってから日本で考えられたとされる。今日、十三回忌までの追善供養をつかさどる仏様たちと言われている。十三の諸尊は、古より日本人に信仰されてきた馴染み深い仏や菩薩である。

（不動明王、釈迦如来、文殊菩薩、普賢菩薩、地藏菩薩、弥勒菩薩、薬師如来、観音菩薩、勢至菩薩、阿弥陀如来、阿閼如来、大日如来、虚空蔵菩薩）

④ 二股村一字一石経塚（ふたまたむらいちじいっせききょうづか）

（十三仏の反対側の墓地の一角）一字一石経とは、平たい小石1つに一文字ずつ経典の文字を書き写し埋納したもので、江戸時代に盛行したとされる。

ここの経塚は、宝永の噴火の後、噴火で犠牲になった人々を供養するために作られたと考

えられている。道の拡幅に伴い発見されたもので、約五万二千個の石が発掘され、石には墨で1文字ずつ経典の文字が書かれていた。

⑤ 栗倉観音堂

この観音堂内には3体の観音像が祀られている。中央の観音像は、舟型の石碑に観音菩薩を浮き彫りにしたもので、「横堂（よこどう）」や「西国さいごく」などの巡礼名と江戸時代の年号が刻まれており、観音巡礼を行った記念に造られたものである。

観音巡礼は各地にあったが、この辺りでは、富士横道観音霊場巡りがあり、その第1番目が東町の宗心寺となっている。富士地域に33箇所があったとされるが、33箇所に入っていない場所もいくつかあり、ここはそういったところの1つであったと考えられる。

⑥ 栗倉子安さん（あわくらのこやすさん）

ここには、「子安さん」と呼ばれている石像があり、子供を抱いた姿をしている。昔から、出産・育児は大切な事柄であり、安産や無事な成長を神仏に祈ることが熱心に行われた。富士宮市内でも子安信仰は盛んに行われ、いくつもの子安講が組まれてきた。かつては縁日に出店が立ち並び賑わったという。

⑦ 山辻の石畳

ここは、通称山辻とよばれた、山稼ぎに行く人達が利用した道と富士登山道がぶつかったところである。ここから林のなかを歩いて行く道が登山道（道者みち）であるが、同時に村山地区の人々にとって大事な生活道路であり、急な坂道が雨で流されないよう石畳にしたと考えられている。この地域には急な坂道が多く、昔は方々に石畳の道があった。山辻には以前「富士山」と記された石の道標が立っていたが、現在は村山浅間神社境内に移されている。

⑧ 西見付跡（にしみつけあと）

見付と言うのは見張り役をおいていたところで、ここは村山修験集落の入口だった。村山浅間神社の東側の道を下ったところにも東見付跡がある。記録では、富士山の登山者は、ここで130文、今でいうと2~3千円を支払って山頂へ向かったとされる。